

和讃の研究

多屋頼俊著

法
藏
館

多屋頼俊（たや らいしゅん）

明治35年，福井県に生まれる。昭和2年，大谷大学文学部卒業。大谷大学名誉教授。文学博士。昭和62年，勲四等旭日小綬賞受章。平成2年7月13日逝去。

著書 『和讃史概説』『源氏物語の思想』（法藏館），『日本古典文学大系82 親鸞集・日蓮集』共著（岩波書店）

和讃の研究 多屋頼俊著作集 第2巻

平成4年1月20日 第一刷発行

平成5年2月10日 第二刷発行

著 者 多 屋 頼 俊

著作権者 藤 井 き ん 子

発 行 者 西 村 明

発 行 所 株式会社 法 藏 館

600 京都市下京区正面通烏丸東入
振替京都7-2743 電話075(343)0458

和讃の研究 目次

一 和讃の発達

和讃の発達……………三

日本の仏教讃歌 和讃を中心に……………二九

来迎の諸和讃……………四三

附 来迎の聖衆と二十五菩薩……………五五

二 聖徳太子の和讃と講式

一百十四首太子和讃考……………七一

聖徳太子讃仰の文学 和讃と講式……………二六

聖徳太子和讃と聖徳太子講式……………三九

附 聖徳太子の『伝暦』……………五一

三 三帖和讃

三帖和讃の本文について……………一〇

文明開板の三帖和讃……………一九

四 時宗の和讃

一遍上人の文芸……………	二〇九
時宗の本作の和讃……………	二三八
移動する和讃……………	三〇三
時宗の和讃についての二三の疑問……………	三三五
古写・時宗の和讃翻刻 金蓮寺襲蔵『和讃』……………	三三八
附 金沢文庫本伽陀集……………	三七七

五 研究余滴

和讃について……………	四〇八
親鸞聖人の文芸 御和讃について……………	四二三
後記……………	四三二

和讃の研究

和讃の発達

一 和讃研究の必要

和讃は日本歌謡の一種であり、日本文学の一類であるが、和讃を諷誦している仏教徒は、和讃を尊い聖教として崇敬し、教義的に考察しているが、文学としては取り扱っておらない。一方日本文学研究家は、和讃をほとんど日本文学の圏外に置いている。ところで和讃はわが歌謡の中で如何なる地位を占めるかを見ると、わが歌謡は、神楽、催馬楽等をはじめ、今様、小唄乃至長唄や端唄の如き、また少しく系統の異なったものに宴曲や謡曲の如きがあり、その種類は甚だ多いが、一々歌謡について、その歌詞の製作せられていた期間及び流行していた期間、即ち歌謡としての生命を観ると、案外に短い。謡曲の如きは、最も長いものであるが、それでもその詞曲が製作せられたのは、室町時代の初期から、江戸時代の初期までで、三百年を越えないものである。これに比して、和讃は平安朝の中期に成立して以来、現代にまで製作が絶えないものであって、その生命の長いことは歌謡中に全く類例がない。而して和讃は、その生命の長さに比例して、量もまた甚だ多く、しかもその多くは、敬虔な熱烈な信仰から溢れ出たものであって、高い文学的価値を有している。即ち和讃は、生命の長さにおいて、量において、質において、まさに日本歌謡中の王座を占めるものといひ得るであらう。

日本仏教徒は、和讃の外にも幾多の勝れた文学的作品を生み出している。即ち奈良朝以来、仏教思想を詠じた多数の和歌があり、仏教特殊の歌謡としては、「讃嘆」「教化」「講式声歌」の如きがあり、散文には『三宝絵詞』『今昔物語』『宝物集』等の説話集、『一言芳談』『歎異抄』等の法語をはじめ、随筆、消息等、その種類が少なくない。これら性質の異なったものを一律に論じて、文学的価値の高下を定めることはできないが、仏教の思想信仰と、文学としての芸術的価値を兼ね備えているものとしては、まず和讃を挙げることに、おそらくは何人も異論はないであろう。即ち和讃は日本仏教文学の精華と称して、あえて過言ではないであろう。

和讃の研究は、現在学界においては僅かに着手せられたに過ぎないけれど、それは日本歌謡史、日本文学史、日本仏教史、乃至日本文化史の研究において甚だ重要な意義を有するものであることは改めていうまでもないであろう。なおここにもう一言加えておきたいことがある。和讃は仏教各派において、多く聖教として尊敬して来たものであるが、それを文学として自由に研究するというと、何か聖典の神聖な価値を害するかの如く思う人があるかもしれない。がそれは、そうではなくて、聖典が本来備えている尊い価値の一半——それは従来無意識に過ごしてきたもの——を新たに認めるというまでである。如何なる聖教も、言語によって表現される以上、文学的制約を遁れることはできない。従って内容としては高い宗教的価値を有していても、文学的価値を具えていないものは、広く流布するに至らず、読者に深い感銘を与えることもできず、為に宗教的価値をも發揮することができないのである。古来人口に膾炙し諸人の渴仰を得ている和讃は、いずれも文学的傑作であること、江戸時代以来、極めて多くの和讃が作られているが、世に用いられることの少ないのは、文学的価値に欠けているためであることを観るならば、和讃を文学として考察することの必要も自ら明らかになるであろう。和讃の製作は、現在も絶えてはおらない。しかして将来はこれが大いに隆盛に趣くように筆者は衷心希望している者であるが、近世以降の和讃の作者は、教義

を平易通俗に述べることを以って和讃の第一義と考え、和讃が文学であることを殆ど念頭に置いていない。がこれでは到底勝れた和讃が生まれるはずがない。また従来仏教徒の和讃研究は、教義の研究に限られていた。がそれは和讃研究の一面だけである。それ故に更に古来の和讃を文学的に研究し、以ってその文学史上、文化史上の価値を闡明し、併せて将来の和讃作者の覚醒を促す必要があると思う。

二 和讃の内容と形式

「和讃」は和語讃嘆の意と解するのが一般の通説であるが、これは「和讃」という言語の説明にはなるが、文学上の一種類である「和讃」なるものの説明にはならない。和讃は和語の讃嘆ではあるが、和語の讃嘆が直ちに和讃ではないからである。しからば和讃とは如何なるものであろうか。いま便宜上、内容と形式とに分けて古来の和讃を概括して述べよう。和讃は仏教讃歌の一種であるから、いうまでもなく仏教の思想信仰を内容としている。即ち仏の思想を讃仰し、浄土を欣求し、教法に帰依し、高僧大徳の行業を顕揚し、自己の信仰を表白し、あるいは現実の生活を懺悔して仏の救済を願ひ、人生の帰趣を述べて自他の戒とすること等内容としている。また和讃としては、当然右の如き内容を有すべきであらう。従って近世にできた「達磨和讃」(娼婦を詠じた戯作)「夢代へ和讃」の如き類は、和讃と題していてもその内容から見て和讃の圏外に置くべきものと思う。

次に和讃の形式は、古来すべて、七五、七五、七五と始終一貫七五調を以って組織せられており、その句数は四句以上、数十百句と随意に続けてゆくもので(三句以下の和讃は存しない)句数には制限がない。而して句を、四句ごとに一節をなすようにして、四句を一首と数え、数首乃至数十百首を続けて一篇の和讃を組織しているものと、四句ずつに切っていないものがある。

従来一般に、和讃は四句ずつで一首をなすものと考えられていたが、この如き形式のものは管見においては、親鸞聖人の和讃が最古で、その後にも、稀にしか存しないものであって、大部分の和讃は四句一首という形式を踏んでいない。¹⁾ さて和讃が上記の如き形式の一群の歌謡であることを知る時、「仏足石歌」「讃嘆」「教化」「講式声歌」乃至「御詠歌」「巡礼歌」等は、内容は和讃と相通ずる仏教讃歌であるが、歌謡としては和讃と区別しなければならぬことが、明らかになるであらう。

なお和讃は、仏前またはこれに准ずる場所で、敬虔に厳肅に誦唱するものである。それ故に「いろは歌」の如き、今様の一部や法文歌の如きは、七五調で仏教思想を詠じたものであるが、和讃とは区別すべきものと思う。

三 和讃が成立するまで（附 日本仏教讃歌の概観）

和讃の発生発達を述べる前に、簡単に日本仏教讃歌の全体を概観して、和讃がわが仏教讃歌中において如何なる地位を占めるかについて一言しておきたい。

日本人の仏教に対する理解が深くなり、文化が進むにつれて、大陸から渡来した偈頌の類を日本人の手によって作ろうとする要求が生ずるのは当然である。この要求に応じて生まれたものは、直接漢土の偈頌を模倣した漢詩文の讃頌であった。しかして奈良朝から平安朝の中期頃までは、漢詩文の讃頌がわが仏教讃歌の主流をなしていた。しかし漢詩文は要するに外国からの借り物であるから、日本人としては国語によって、その思想感情を表現したいと欲求せずにはおられない。この欲求から国語の仏教讃歌が生まれてきたのである。

国語による仏教讃歌の最古のものは、和歌の形式であった。即ち『万葉集』巻八に「仏前唱歌」と題して、「時雨の雨間あまなくなあま零りあまそ紅にはへる山の散らまく惜しも」という一首を挙げ、左註に、

右、冬十月、皇后宮之維摩講、終日供養大唐高麗等種々音楽、爾乃唱此歌詞、彈琴者市原王、忍坂王（註略）、歌子者田口朝臣家守、河辺朝臣東人、置始連長谷等十数人也、

とある。右の冬十月は天平十二、三年の頃かと思われるのであるが、山階寺（興福寺）で行われた光明皇后御主催の維摩講に右の和歌形式の謡物を仏前で唱ったのである。右の歌は仏教思想を詠じたものではないから、仏教讃歌とはいいい難いと思う。仏教思想を詠じた讃歌としては、天平勝宝四年四月、東大寺の大仏開眼供養に、元興寺から獻つた三首の歌を挙げるべきであらう。

乃利乃裳度 波那佐岐邇多利 計布与利波 保度介乃美乃利 佐加江多万波舞

右は三首の中の第二首であるが、これらの歌は開眼供養の有様から見て、仏前でせられたものと考えられる。⁽²⁾ 次いで天平勝宝五年に製作せられたと推測せられる「仏足石歌」がある。⁽³⁾ 仏足石歌は仏足石（釈尊の御足跡を石に模刻したもので、文室真人智努王が、茨田女王の追福のために、天平勝宝五年に製作されたもの）製作の趣旨を述べ、これを讃仰し、解脱を願ったもので、「恭仏跡」と題する十七首と「呵嘖生死」と題する四首と、合計二十一首からなるものである。

舍加乃美阿止 伊波爾宇都志於伎 由岐米具利 宇夜麻比麻都利 我我与波乎閑牟 己乃与波乎閑牟
比止乃微波 衣賀多久阿礼婆 乃利乃多能与須加止奈礼利 都止米毛呂毛呂 須々米毛呂毛呂

右は恭仏跡の第十四首と、呵嘖生死の第一首である。仏足石歌は全部右の例の如く、短歌形式よりも一句多い六句体のものである（この形式を「仏足石歌体」という）。この六句体は短歌形式から派生したもので諷誦の際の口調の都合から生じたものと認められている。この仏足石歌と右記大仏開眼供養に獻げられた歌とは、奈良朝における仏教讃歌として最も注意すべきものである。かくして国語による仏教讃歌はまず和歌の形式によって生まれ出たのであ

るが、この形式の讃歌は、十分発達するに至らなかった（近世にできた御詠歌は短歌形式である）。蓋し短歌形式または仏足石歌体では、形式が短小であるために、複雑な感情、大きな組織をもつ思想を表すのには不十分であるからである。和歌には、長歌という、いくらでも長く言葉を続け得る形式もあるけれど、長歌は製作に困難な点があった。奈良朝の初期には既に衰退の傾向にあったもので、この形式は仏教讃歌に採用せられるに至らなかった。即ち国語による仏教讃歌を創り出そうとする要求は、和歌形式では満足されなかったのである。ここにおいて「讃嘆」が生み出された。

今日「讃嘆」と呼ばれるものは三篇ある。「法華讃嘆」と「百石讃嘆」及び「舍利讃嘆」である。「法華讃嘆」は、法華会、法華八講等の「薪の行道」の時に唱えたもので、

法華経を、我がえしことは、たぎごり なつみ 水くみ つかへてぞえし（『三宝絵詞』による）

というのがその全文で、形式は短歌式であるが、実際に諷誦する時は、結句を繰り返して、仏足石歌と同形式にしていたようである。「百石讃嘆」は、『拾遺集』（顯昭本による）には、

もゝさかにやそさか添へて給ひてし乳房のむくい今日ぞ我がする

とあり、『三宝絵詞』には、

もゝさくや やそさかそへて たまひてし ちぶさのむくい けふせずば
いつかわがせむ としはをつ さ
よはへにつつ

とあり、叡山に伝えているものは、

百石に 八十石そへて 給ひてし

乳房の報い 今日ぞわがするや 今ぞわがするや

今日せでは 何かはすべき 年も経ぬべし さ代も経ぬべし

と十句になっている（なお高野山に伝えているものは十四句に引き延ばされている）。思うに、「百石讃嘆」は、もとは、短歌形式（『拾遺集』所伝）、または仏足石歌体（叡山所伝の初六句）であつたのであろう。しかしてそれが漸々延長せられて、九句、十句、十四句等になっていったのであろうと推測する。しかしてこの如く延長せられていくところに、日本仏教讃歌の本来要求の形式を認めることができると思う。「法華讃嘆」も「百石讃嘆」もともに、作者も製作年代も明らかでないが、その原形はおそらく奈良朝の末期頃に作られたのであろうと思う。次に「舍利讃嘆」は、平安朝の初期にできたと認められるものであるが（慈覚大師の作と伝えられている）、これは同じく讃嘆といつても、「法華讃嘆」や「百石讃嘆」とは同日に談き難い程に進歩した形のもので、前中後三段に分かれ、七十二句（一句七、八字乃至十六、七字）から成る長編である。左にその前段だけを挙げておこう（『常楽会法則』による）。

仏の御舍利は

遇こと難しや 敬こと難しや

一度も遇て 誠心に礼めば

悪趣をぞ永く離るゝや 浄土にぞ早く生まるゝや

無量劫を経しかども 未曾有にもあはざりき

今日ぞ我あへる 今ぞ礼み奉まつる

見る人聞人 悉く 近くも遠くも諸共に

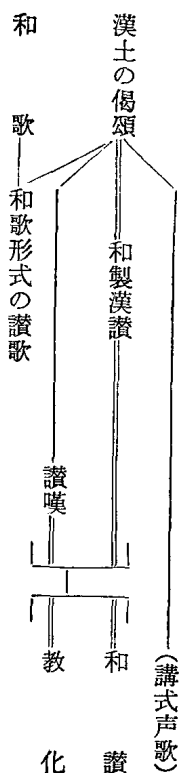
仏の道に入はてぬ 聖りの位に定まりぬ

釈迦如来照したまへ 弥勒慈尊鑑みたまへ

「舍利讃嘆」は、短歌及び仏足石歌の形式から脱出して、新しい日本仏教讃歌の基礎が確実にできている。この「舍利讃嘆」が、もう一步進んで、語調を調えたものが即ち和讃であるのである。さて以上三編の讃嘆を見ると、歌謡としての形式は、皆異なっている。もっとも「法華讃嘆」は短歌形式であり、「百石讃嘆」は、もと短歌形式または仏足石歌形式であろうと考えられ、「百石讃嘆」における末句を繰り返す形式は「舍利讃嘆」にも認められるから、それぞれ若干の共通点はあるが、共通点よりも差違点の方が大きく、三編の讃嘆を、「讃嘆」の名称によつて一類の歌謡として取り扱うことはできない。思うに讃嘆は、日本仏教讃嘆が、和歌形式から、更に新しい形式を求めて進む過渡期の産物であつたのである。

さて、先に一言した如く、奈良朝から平安朝の中期にかけて、わが仏教讃歌の主流は、中國の偈頌を直接模倣した漢詩文に在つたが、遣唐使留學生が廃止せられてから、一般に大陸崇拜の思想が漸次減退し、日本的自覚が擡頭するに及び、仏教讃歌は一大躍進を遂げて、二つの新しい詩形を創り出した。「和讃」と「教化」がこれである。「教化」については、他に執筆せられる方があるであろうから、今は省略するが、ともかく「教化」は、和讃に次いで、日本仏教讃歌史上に重要な地位を占めるものである。この外に「講式声歌」と呼ばれる一類の讃歌があるが、これは十分に発達せずに終わったものであり、和讃の成立には、影響を与えていないと思うから省略する。

以上記した所要約すると、日本の仏教讃歌は、漢土の偈頌を模範として、まず漢詩文の偈頌（これを仮に「和製漢讃」と呼ぶ）を製作していたが、一方、国語による讃歌を作ろうとし、奈良朝にまず和歌形式の讃歌を作り、次に讃嘆を作つたが、それでは満足されず、平安朝の中期に至つて遂に「和讃」と「教化」を作り出して、日本仏教讃歌が、到着すべき点に到着した。しかし平安朝末期には、和讃と教化は、和製漢讃を圧倒するに至つた。即ち図示すれば次の如くである。



四 初期の和讃

さて、以下平安朝及び鎌倉時代の和讃について、考察していきたいと思うのであるが、その前に一言断わっておかねばならぬことがある。即ち古い和讃の大部分は、作者も製作年代も明確ではないので、誰某作の何和讃と云っても、果たして所伝の作者の手に成るか否かをまず考証しなければならないが、限られた紙面では書くことができないから、ここには、自分の考察の結果だけを記すことにする。また和讃の本文も確実なものが少ない。管見においては、室町以前の和讃中、作者の自筆本が伝わっているのは、親鸞聖人の和讃の一部分だけであり、真筆本に准すべき確実な古写本が伝わっているのは、親鸞聖人の和讃の大部分と一遍上人の「別願讃」及び空阿上人が諷誦した和讃に類するものと、それだけである。平安朝時代の和讃の確実な古写本は、未だ一点も発見せられていない。それ故に何和讃といって引用しても、それには転写の間に生じた誤脱、及び後人の改竄が、多少は存するものと予定してみなければならないのである。

さて、和讃は平安朝の中期に成立したと前にもちょっと記したが、管見においては、源信僧都の作と伝えられる